

## 教育改革を志向した研究

## 学生の個人指導に資するディプロマポリシー要素の見える化の検討

渡邊康晴【医療情報学】、河合裕子【医療情報学】、山崎翼【はり・きゅう学講座】

【背景】本研究課題の申請時には、期末試験等の解答データを横断的に集積し、統合データベースを構築した上で、解析に用いることを主眼としたプロトコルを企画した。研究課題の目的は、「科目教育や個人学習に資するデータを提供して、教育成果の見える化を強力に促進すること」であった。しかし、遺憾ながら、学科と申請者との調整が遅れ、予定した研究プロトコルを研究期間内に遂行できなかった。

一方、本学はディプロマポリシー（以下 DP）を基軸とした学修者本位の教育の実現することを教育のゴールに掲げた（令和元年2月7日に発出した「本学における教育改革の基本方針について」より）。このゴールに到達するには、学修の成果や学生の成長実感を精緻に評価できる指標の開発が重要である。加えて、DP に基づいた学修成果の見える化も不可欠となる。

成績評価の指標として、本学では GPA を用いている。GPA は個人成績を分かりやすく示すものの、データの粒度が荒く、学修成果や成長実感の評価には適さない。また、DP との関連についても十分に表現できない。他方、DP の評価として用いるのであれば、GPA と強く連関するデータ指標であることも必要となる。そこで本研究は「科目教育や個人学習に資するデータを提供して、教育成果の見える化を強力に促進すること」との当初の目的の達成を視野に入れ、DP との関連を持ちながら学修成果を精緻に見える化できる方法を検討することとした。

【方法】対象は 2019 年度に本学の保健医療学部在籍する学生とし、カリキュラムが同一である救急救命学科の 2017 生～2019 生、柔道整復学科の 2018 生、2019 生とした。

DP との関わりを解析するため、DP 科目対比表を使用した。下表は柔道整復学科の対比表の一部で、DP を知識・理解、思考・判断など、5 要素に分けて示している。授業科目ごとに涵養する

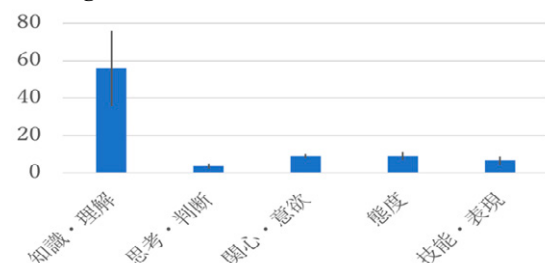
授業科目	形態	学年	単位	時間	ディプロマポリシー関連科目【対象科目に○、○を付けて下さい】				
					必修	選択	前期	後期	
大学の教育と研究	講義	1 期	1	15					
コミュニケーション論	講義	1 期	2	30					
基礎ゼミ	演習	1 期	1	30			○		
現代国際語解	講義	1 期	1	15			○		
生活と環境	講義	1 期	1	15			○		
学習技法	講義	1 期	1	15				○	
キャリアデザイン	演習	1 期	1	30			○		

DP の各要素を明示し、◎や○の印を付している。この表を元に、各科目を 5 つの DP 要素に分解した。具体的には、◎は 2 点、○は 1 点と換算した。ただし、印の数は科目ごとに異なり、科目間の換算値の合計にバラツキが生じる。この問題に対処するため、換算値の合計で除して科目ごとの点数の違いを平準化した。

各科目を DP 要素に分解した後、科目ごとの成績評価から GPA を算出する手法を用いて、個人ごとに各 DP 要素の合計値を求めた。この値を学科ごとかつ学年ごとに偏差値化した。

【結果と考察】グラフは柔道整復学科 2019 生（1

年次）の DP 要素別の科目別成績の合計値（GP：Grading Points）を示す。DP 要素別に見ると、



知識・理解の値が突出して大きく、思考・判断が最小となった。医療系の低年次では、解剖学や生理学といった基礎医学領域の科目配当が多く、知識・理解に偏重した教育特性となるのはやむを得ない。しかし、この大きな偏りが医学教育上の課題とも認識されている。学修者本位の教育を実現する重要なポイントとして、各年次ごとの DP 要素の偏りは、注目すべき指標の 1 つと考えられる。

一方、2018 生（2 年次）では思考・判断が大きく増加した。履修年次が上がるとともに涵養される DP 要素が変化していく様子を捉えているものと推察される。

	GPA 偏差値	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度	技能・表現
A	51	52	47	45	49	48
B	51	50	51	63	47	57
C	51	50	53	50	60	56

上表には DP 要素別に個人の偏差値を示した。偏差値であるため、集団における平均値が 50 として表記される。表では、成績が平均的かつ GPA が同一である 3 名の学生を抽出した。

B の学生は、関心・意欲の要素が高値を示し、他の学生に対して優れていることがわかる。一方で態度が低値であり、今後の伸びしろとして自身で認知し、また教育・指導すべき項目であると識別できる。C は態度が優れていることが分かる。

A は B や C と比べ、知識・理解の要素がわずかに高いが、その他の DP 要素は平均以下となっている。一見すると、B や C に比べて低値を示す項目が多く、矛盾したデータのように思えるかもしれない。この現象は知識・理解の要素比率が他の要素に比べて大きいために生じており、この観点からも過度の DP 要素の偏りは好ましくないことが分かる。

この研究では「学生個人指導に資する DP 要素の見える化」を目指したが、DP 要素の偏りという課題に直面した。各科目と DP 要素の関係が設定された際、GPA と紐付けた本研究課題のような解析を行うことは想定されていない。しかし、大学認証評価等で求められている 3 つのポリシー、とりわけ DP に基づいた評価を行うには、このようなアプローチは必須である。今後さらなる検証を行って、よりよい各科目と DP 要素のあり方についてのデータを提供することを目指したい。